障がい学生支援

今年度前期は新型コロナウイルスの影響を受けつつも、少しずつ対面での作業が出来るようになり、ZoomやSlackのみならず、コミュニケーションの機会を増やすことが出来ました。

前期の支援では、直接支援は聴覚障がい学生への情報支援が大半でしたが、間接支援業務は、バリアフリーチェック講習会の取りまとめや、言葉の地図の改定作業、それからオープンキャンパスの出展など、パソコン業務以外にも多岐にわたる活動が出来ました。

言葉の地図の改定作業は、今年の2月に行ったバリアフリーチェック講習会に続けて、大学内のアクセシビリティの向上を図るために行われたものです。言葉の地図は、視覚障がいがあり、キャンパスマップの視覚情報によりアクセス出来ない方が、テキスト情報の読み上げによりそれぞれの建物へアクセスできるように整備したものです。例えば、「○○を出て、10m歩くと点字ブロックがあります。9時の方向に曲がり20m歩くと、止まれの点字ブロックがあり、◆◆につきます」などといった情報になっていますが、今回の改定作業はそれらの通路が適切に通行可能であるのかなどをチェックし、必要に応じて新たな経路についても検討しました。

これらの活動は、実際に大学に通学している視覚障がいのある学生の場合は、頭の中に描かれた地図を元に通学するため、あまり重要ではない場合もありますが、来学されたことがない来訪者の方や、これから新たに入学を希望する視覚障がいのある学生にとって非常に重要な情報となります。今後もこれらの情報は随時アップデートしていく予定であり、バリアフリーチェック講習会の成果と共に大学の内外に発信をしていく予定となっています。ご関心のある方がいらっしゃれば、是非当室までお声がけください。よろしくお願いします。（益子）

よるダイバー

気軽な雰囲気でダイバーシティについて学びあうプチ勉強会「よるダイバー」。2022年度前期はオンライン形式での開催となりました。今年度も、男女共同参画、障がい、セクシュアル・マイノリティ、文化的多様性をテーマとして、基礎知識や時事的な話題についての講義や、それぞれのテーマに関するディスカッション、jamboardを用いたグループワークなど、多彩な方法で楽しく学ぶ時間を持ちました。また、第6回目は希望者を募って対面形式でも開催することができました。よるダイバーでは久しぶりの対面でのディスカッションに、参加者も「より話を深めることができた」と満足そうな様子でした。また、今回は退職された元教員やプレミアムカレッジ生、社会人など、多様な背景を持つ幅広い年齢層の方の参加がありました。受講者の方から寄せられた「みなさんとお話しすることができて、自分の考え方の幅が広がり、他の方の考えを聞く機会の大切さを実感することができた」という感想からは、参加者のダイバーシティがもたらす効果も感じることができました。

後期も引き続き、よるダイバーの開催を予定しています。関心のあるみなさまのご参加をお待ちしています。（藤山）

よるダイバー2022前期　コンテンツ

5月13日　ダイバーシティ推進室の概要と基礎知識／講師：藤山新、益子徹
5月20日　数値から見る障がいの理解／講師：益子徹
5月27日　ジェンダーギャップ指数からみる男女共同参画／講師：藤山新
6月10日　ハカに見る文化的多様性／講師：藤山新
6月17日「合理的配慮」ってなんだろう／講師：益子徹
6月24日　基礎的環境整備やアファーマティブ・アクションの進め方／講師：益子徹
7月 1日　フルムーン夫婦グリーンパスに見るセクシュアル・マイノリティ／講師：藤山新
7月 8日　ひとまず、ダイバーシティってなんだろう？／講師：益子徹

コラム　ダイバーシティ・ブックレビュー（ダイバーシティ推進室 特任研究員：益子徹）

伊藤尚子著　『あのて、このて』高次脳機能障害のキセキ　論創社

みなさんは、「高次脳機能障がい」という障がいについてご存じでしょうか。「高次脳機能障がい」という障がいは、ここ10年ほどの間に世間でも話題になるようになりました。ケガや病気による脳の損傷が原因で、文字の読み書きや、記憶、感情表現などに障がいをきたすのが大きな特徴です。

この本の主人公は、以前本学に在籍していた伊藤遼輔さんという方で、著者はそのお母さんの尚子さんです。遼輔さんは、障がいを負ったときに、医師から「もう食べることも、歩くこともできないだろう」との宣告を受けましたが、その後、福祉施設でお仕事をするまでに回復しました。

伊藤遼輔さん（中央）とご家族　※著書より

私はこの本の中で、尚子さんと遼輔さんの日々を読んだ時、ご本人でも第三者でもない、家族という存在について深く考えさせられました。日に日に回復すると共に現れる喜びと苦悩の記録は、支援者を志す学生のみでなく、きっと多くの人の心を揺れ動かすものであると思います。

この度、この本を遼輔さんとご両親から寄贈していただきました。当室にて貸出しを行っていますので、興味のある方はぜひお読みください。（益子）

編集後記

DIVERSITY WEEKも２回目となり、今年度は『防災』をテーマに、様々な角度からマイノリティ支援に必要なことを、主に「3.11」から見つめ直す機会となりました。我々大人は当時の生々しい記憶を呼び覚ます事となりましたが、学生達にとっては幼い頃のうっすらとした記憶でしかないのですね。天災はいつかまた必ずやってきますが、人災を繰り返さないために、今私たち一人ひとりに何ができるかの知識を身につけておきたいですね。（兼子）

東京都立大学　ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2022年8月31日
編集・発行

No.32 August 2022

Newsletter
ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY 東京都立大学

2022 june.20-24 DIVERSITY WEEK TMU DIVERSITY PROMOTION OFFICE
ダイバーシティの視点で見る防災・減災・復興

「DIVERSITY WEEK 2022」開催報告

ダイバーシティの視点で見る防災・減災・復興

2022年6月20日（月）から24日（金）までの5日間、「ダイバーシティウィーク2022」を開催しました。

このイベントは、「男女共同参画の推進」「障がいのある構成員の支援」「多様性を踏まえた構成員支援」という、ダイバーシティ推進室の3つの取組を広く知ってもらうことを目指し、2021年度から始まったものです。

第２回目となる今年度は「ダイバーシティの視点で見る防災・減災・復興」をテーマとし、講演会や映画の上映会を対面形式で開催しました。また、会場となったTMUギャラリーには、ダイバーシティ推進室の取組や、なぜ防災にダイバーシティの視点が必要なのかを解説したポスターを展示したほか、学内所管部署の協力を得て、都立大の防災マップや備蓄している防災用品の展示も行いました。

５日間のイベント全体で、教員、職員、学生あわせて78名に参加していただきました。イベントに参加した方からは、「ダイバーシティ推進室がどういう活動をしているか知らなかったので、知る良い機会になった」「学生生活をしながら、あまり気にならなかった事、気にしていなかった事を考えるきっかけになったと思います」などの感想が寄せられました。

ダイバーシティ推進室では、今後も講演会をはじめ、さまざまな取組を行っていきます。引き続き、ご注目ください。（藤山）

DIVERSITY WEEK 2022 映画上映会
「架け橋」きこえなかった3.11

東日本大震災で、聴覚障がい者はどういった状況に置かれたのか。自身も聴覚障がいを持つ今村彩子監督が、宮城県を中心に２年4か月に及ぶ取材を行った、災害の現場における聞こえない人の姿を伝えるドキュメンタリー作品『「架け橋」きこえなかった3.11』の上映会を行いました。

震災発生直後より、聴覚障害者宮城本部の対策本部長として聴覚障がい者の支援活動を支えていた小泉正壽さんを中心に、さまざまな聴覚障がいの当事者が、それぞれに異なった困難に直面したようすや、それを支える人たちとの関係などが丁寧に描き出されました。

参加者からは、「人と人とのつながりが大事。周りの人の助けが何よりも重要であることがわかりました」「命に関わる情報に格差があってはいけない、という言葉が印象的だった。地域のつながり、人のつながり、行政の支援の大切さを感じた」「ひとことで聴覚障害といっても様々な立場におかれている人がいること、当事者自ら積極的に行動されていることなど、色々なケースのお話を聞けて勉強になりました」など、今村監督のメッセージが強く伝わったことが理解できる感想が寄せられました。（藤山）

Contents

1
「DIVERSITY WEEK 2022」開催報告
映画上映会「架け橋」きこえなかった3.11

2
スタッフ活動報告会「バリアフリーチェック講習会報告」
男女共同参画講演会「ジェンダーの視点で考える復興・防災」
手話講習会（初級）

3
第１回バリアフリー講習会「障害のある人の防災とその避難について」
文化的多様性講演会「多文化共生社会における災害対応」
一時保育施設「都立大KIDS」見学会

4
障がい学生支援
よるダイバー
コラム「ダイバーシティ・ブックレビュー」

DIVERSITY WEEK 2022 スタッフ活動報告会
バリアフリーチェック講習会報告

昨年度2022年2月に行ったバリアフリーチェック講習会の内容について、今回の報告会では、３名の学生支援スタッフを中心に報告を行い、大学内の物理的なバリアについて参加者（教職員５名、学生22名）と共にその課題を共有しました。

報告の中では、バリアフリートイレや各棟のエレベーターに加え、建物の内外にある各通路の点字ブロックや障害物の有無について、点検を通して発見された課題を共有することが出来ました。

参加者からは、「（中略）実際、看板の位置や、ゴミ箱の位置など、当事者になってみないとわからないような事が多く、町でみた時に、少しでも改善できるように心掛けるようにしようと思いました。またトイレの開閉は、引き戸でも困難に感じるのだなと思い、利用者がいた場合、手助けが出来るようにします」という声が挙げられました。また、発表した学生支援スタッフからも、「今回バリアフリーチェック講習会に参加させてもらったことで、バリアフリーなものにするために、どんな着眼点を持っていたらよいのか、例えばトイレのボタンの位置で半身麻痺の方が押しやすい位置など、益子さんが実際に椅子を用いて説明されていたのでとても分かりやすかったです。また、来てくださった方のご質問を聞いたことで、新たな視点やアイデアを知ることができて面白かったです」といった感想が寄せられ、学内の物理的なアクセシビリティの向上のみならず、それぞれのバリアに関する捉え方の変化にも影響をもたらしているといえます。

この講習会は夏期休暇中も２回実施予定です。点検の結果については引き続き、本学のバリアフリー推進に資するため、学内において提言していきたいと考えています。みなさんも日々の大学生活の中で、こういったバリアについてお気づきの点がありましたら、ぜひ当室までご連絡ください。どうぞよろしくお願いします。（益子）

DIVERSITY WEEK 2022 男女共同参画講演会
ジェンダーの視点で考える復興・防災

男女共同参画の立場から、防災や災害からの復興に際して、どういった取組が必要なのか。また実際の事例を通して、防災や災害からの復興の場面において、男女共同参画の視点の必要性と有効性を理解することを目的に、復興庁男女共同参画班で政策調査官を務める石塚文絵さんを講師としてお招きして、講演会を開催しました。

東京都特別区の職員として、福祉事務所や子ども家庭支援センター、点字図書室など、まさにダイバーシティにかかわる職を経験されてきた石塚さんは、東日本大震災後は被災地の自治体で支援事務にも従事しました。こうした経験を踏まえ、被災者の状況は時間の経過とともに変わっていくため、そのフェーズに応じた支援が必要なことや、避難所にはあらゆる世代の、さまざまな家族構成の人々が、心身の健康にリスクのある状態で避難してくるため、それぞれの状況に応じた対応が必要なことなどが説明され、こうした状況に的確に対応していくうえで、男女共同参画の視点が不可欠であることが示されました。

また、避難所や仮設住宅をどう運営するか、必要な支援をどう求めていくか、生活再建をどう進めていくかなど、発災直後から復興まで、さまざまな段階で、意思決定への多様な人々の参画が必要な状況が発生することからも、災害時にこそ「問題に気がつくための視点」「誰も切り捨てることのない視点」として、男女共同参画の視点が重要な意味を持つことが指摘されました。

参加者からは、「さまざまな立場の人が支援を求めることを躊躇しない環境になればいいなと思う」「災害時だけでなく、普段から様々な立場の人の考えを知っておくことが必要だと感じた」といった感想が寄せられました。（藤山）

DIVERSITY WEEK 2022 第１回バリアフリー講習会
障害のある人の防災とその避難について

今回のバリアフリー講習会では、「障害のある人の防災とその避難について」というテーマで今村登さん（DPI日本会議事務局次長／自立生活センターSTEPえどがわ理事長）にお話をいただきました。

近年障がいのある学生の大学進学や、その支援は拡充されつつあります。しかしながら、学生生活の中で天災などに見舞われた際に、どのような手立てで共に避難できるのか、減災や防災という観点では支援体制が十分に整備できていない状況があります。そこで今回は2011年３月11日にあった東日本大震災の時の様子を改めて振り返り、障がいのある人の防災についてどのように考えていく必要があるのか、といったテーマで講演をしていただきました。講演の中では、発災後の福祉避難所の設置から稼働上の問題点や、ユニバーサル・デザインを意識した仮設住宅づくりなど、多角的かつ非常に具体的なお話が数多くありました。

学部生からは「3.11は私が小学生の頃に起こったので、その時は実感がわかず、ましてやマイノリティの方々を意識した避難についても考えたことがなかった。（中略）日常の問題から災害時の問題について検討できるし、その逆も考えられるということが興味深かった（中略）」という感想や「大学内のバリアフリーはある程度整っているものと思っていたが、避難所となった際のバリアフリーもふまえて、改めて検討する必要があるのではないかと思った」といった感想が挙げられていました。

今回の講演は“防災“というテーマでしたが、その問題の大きさを踏まえて、当事者や当事者を支援する人を含んだ多様な人たちによって、日々の環境づくりを行う必要が語られていました。今後はこのような講習会のみでなく、１人ひとりが安心・安全に避難が出来るような環境構築に向けて働きかけたいと思います。（益子）

DIVERSITY WEEK 2022 文化的多様性講演会
多文化共生社会における災害対応

一般財団法人ダイバーシティ研究所の代表理事を務める田村太郎さんを講師に迎え、主に日本に住む外国の方が災害時に直面する課題や必要な支援など、災害時における多言語・多文化対応について学ぶ講演会を開催しました。田村さんは1995年の阪神大震災以来、さまざまな現場で災害時の多文化支援に取り組んでいます。その豊富な経験をもとに、外国人が災害時に直面しがちな困難について、たくさんの事例をあげながら説明していただきました。

まず、災害そのもののリスクがわからない、どのように避難すればいいかわからない、避難所でどういった支援が受けられるかわからないなど、外国人ゆえの日ごろの情報不足に基づく困難が指摘されました。それとともに、「不通」「救援」「給水」など、災害時にしか出てこない日本語が理解できないことによる困難や、外国人の行動に対する誤解や偏見などに基づくトラブルや不安などが指摘されました。そうした課題への対応策の一つとして、田村さんは、避難所や災害に関する情報を多言語化して提供することをあげました。これは単に情報伝達を可能にするだけではなく、外国人の方が自身の存在を承認されていると感じる「承認効果」や、「日本語以外の言語を話す人」が存在していることを地域や組織全体で認識する「アナウンス効果」もあり、全体的な安心感を形成することに寄与すると指摘しました。

また、日ごろの取り組みを通して「信頼できる情報ネットワーク」を構築すること、地域の変化に目を配り、外国人とともに新しい災害対応をつくることの重要性もあわせて指摘されました。

参加者からは、「実例が多く、災害時にどのような困難があるかリアルに伝わりました」「ある属性の人だけで物事を見ると抜け落ちてしまう視点があるというところから、よりダイバーシティの必要性を感じました」などの感想が寄せられ、講演会の目的を十分に達成したことがうかがえました。（藤山）

手話講習会【初級】（全８回:5/13から7/8まで開催）

毎年度、募集開始から２～３日で定員に達するほど人気の手話講習会ですが、今年度も参加者は学部の１年生から大学４年生、プレミアムカレッジ生など多岐に渡りました。昨年度はオンラインでの開催になりましたが、今年度は感染症対策をしたうえで対面にて開催しました。７月に開講した対面での”ろう者との交流会”では、ろう者同士が生き生きとした手話表現で話をする様子を見て、受講生たちは驚くと共に充実した表情を見せていました。

講習中には、指文字や挨拶などの手話表現に始まり、趣味や出身地の話などを練習しました。参加者からは「空きコマに無料で手話を学べるならせっかくなので受けてみようという軽い気持ちでしたが、受講して良かったと思います」といった感想や「普段、ろう者の方とコミュニケーションをとる機会がなかったので、良い経験になりました。楽しかったです。ありがとうございました」といった感想もありました。

後期には中級の手話講習会も実施予定であり、受講生からはこちらの受講を希望する声や、実際に手話検定に向けて勉強を進めたい、といった声など前向きな感想が多く寄せられていました。

今後もこのような講習会を通して、コミュニケーションの幅広さや文化の違いなどについて学べる機会を引き続き設けていきたいと思います。（益子）

一時保育施設「都立大 KIDS」見学会

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」の認知度向上と、利用者の増加を目的として、施設見学会を実施しました。対面での開催は、2019年以来のこととなります。

当日は6月末にもかかわらず30度を超える真夏日となりました。南大沢キャンパスで集合した後、徒歩で施設まで向かい、到着後は先生方が入れてくれた麦茶をいただいて一息入れたのちに開会となりました。

参加者の自己紹介の後、施設長の吉池先生より、保育の一日の大まかな流れを紹介しつつ、保育人数が少ない分、一人ひとりの発達段階に応じた保育ができること、保護者のニーズに応じてできるだけ柔軟な対応を心掛けていること、保護者との連絡を密にして、安心して預けてもらえるようにしていることなど、保育にあたって大切にしていることを説明していただきました。

施設長の話に引き続き、2021年度末に実施した施設利用者のアンケート結果から、本施設を利用してよかったと感じた点などの感想を紹介しました。その後、参加者との質疑応答を行い、施設の予約状況やどういった散歩先があるのか、またどのように行き先を選んでいるのかなど、保育の具体的な場面についての質問が多く出されました。最後に、学長室より登録手続きや利用の流れを紹介し、閉会となりました。

一時保育施設については、その存在が本学の構成員に充分周知できているとは言えない状況もあるため、引き続き本企画のようなPRの機会を設けていきたいと考えています。

（藤山）